

## 本学における総合実習の取り組み

伊藤 奈美・坂根可奈子・石橋 鮎美  
別所 史恵・三島三代子・平野 文子

### 概 要

2011～2012年度の総合実習の取り組みについて報告する。2011年度総合実習目標の中で、「看護上の問題と必要なケアを速やかに判断できる」が課題となった。患者理解とアセスメントの必要性から、2012年度の総合実習より「受持患者記録（看護問題とその根拠）」を加えるなど、実習記録用紙の改訂を行った。根拠やアセスメントの記録により、学生の患者理解が促進されたと考えられる。指導側は学生の思考過程が可視化され、指導の方向性が明確となった。臨床で求められる看護実践能力を育成するために、総合実習において教員や実習指導者は、学生が一人一人の患者に対して、根拠やアセスメントを重視した看護の提供ができるように指導していく必要がある。

キーワード：総合実習，看護過程，看護実践能力，アセスメント，  
目標達成状況

### I. はじめに

新人看護師の早期離職の一要因は、看護基礎教育で習得される能力と臨床で求められる看護実践能力との乖離と考えられている。しかし看護基礎教育において、臨地実習での看護を体験する機会は限られる傾向にある。このことが看護基礎教育終了時の能力と、臨床に必要な能力とのギャップを埋めていくことを困難にしている。早期離職に向けた基礎教育および看護継続教育の課題として、看護職者としての自律的な態度の獲得、自己の客観視、自立した社会人としての責務の理解につながる学習機会の提供が必要であることが示されている（塚本他，2008）。卒業後に看護師が働き続けて行く上で、臨地実習での看護体験が果たす役割は大きいと言える。

看護基礎教育と臨床との乖離を少しでも解消しようと、2009年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則が改訂された。新たに看護師養

成カリキュラムに「統合分野」が新設され、「総合実習」が組み込まれた。それを受けて本学においても新設科目として2011年度より開講した。内容には、チーム医療および他職種との協働の中で看護師としてのメンバーシップおよびリーダーシップを理解すること、看護をマネジメントできる基礎的能力を身につけること、医療安全の基礎的知識を習得することなどが含まれる。

2011年度の総合実習では、体験からの理解が学生の達成感につながるなどの評価の一方で、総合実習の目標の「看護上の問題と必要なケアを速やかに判断できる」に対して、2011年度の目標達成状況が十分でないという傾向がみられた（別所他，2013）。学生の自由記載の中で、「病態だけでも記録用紙を使ってアセスメントするほうが全体像をつかみやすい」「患者理解が頭の中では難しい」という意見があった。教員側でも、「学生は、複数の受け持ち患者スケジュール調整や優先順位には目が向くが、個々の患者をきちんと理解する視点が不十分だった」「業

務に流されずに患者理解が深められるよう思考の確認が必要である」とのアセスメントの必要性を求める意見があった。そこで2012年度の総合実習では、患者理解とアセスメントを促す目的で、記録用紙の改訂を行い指導した。

ここでは2011年度から2012年度の総合実習の取り組みと、学生の目標達成状況について報告する。

## Ⅱ. 本学の総合実習の概要

### 1. 位置づけ

本学における教育課程は、「教養・基礎教育領域」「看護専門教育領域」の2分野からなる。臨地実習は、そのうちの「看護専門教育領域」に該当する。

「看護専門教育領域」は、多様化する社会の健康ニーズに対応できる実践能力を養うことを目的とし、「専門分野Ⅰ」「専門分野Ⅱ」「看護の統合分野」の3分野で構成されている。

「専門分野Ⅰ」の実習は、【基礎看護学】の基礎看護学実習からなり、「専門分野Ⅱ」の実習

は、【成人看護学】【老年看護学】【小児看護学】【母性看護学】【精神看護学】の科目別実習で構成されている。

「看護の統合分野」は、「専門分野Ⅰ」「専門分野Ⅱ」の学習を基盤にして、統合・発展させる分野として位置づけられている。この「看護の統合分野」には、様々な対象や健康レベルに対応していく【在宅看護学】、より臨地に近い形で学ぶ【看護の統合と実践】、今日的課題や専門性を追求する【看護特論】【看護研究】がある。そのうち総合実習は、【看護の統合と実践】に該当する。

総合実習は基礎看護実習、科目別実習が終了した、3年次12月に2単位90時間で行っている。

### 2. 実習目的・目標

本学の総合実習の目的・目標を表1に示す。

### 3. 実習方法

#### 1) 実習内容

島根県立大学短期大学部看護学科3年次において、すべての科目別実習が終了した看護

表1 総合実習の目的・目標

1. 実習目標
複数の患者を受け持ち、多重な課題に対応していく実践能力を養うとともに、医療安全、倫理的判断にもとづく主体的な行動、医療チームの一員としての連携・協働について学ぶ。
2. 実習目標
1) 複数の患者を受け持ち、優先度、時間配分を考慮して看護を展開する。 (1) 複数患者の情報を短時間で簡潔に把握できる。 (2) 看護上の問題と必要な看護を、速やかに判断できる。 (3) ケアの緊急度・重要度を判断し、優先順位を適切に決定できる。 (4) 複数患者に対するタイムスケジュールを、時間配分を考慮して作成・修正できる。 (5) (1)～(4)を統合して、必要なケアを責任をもって時間内に実施できる。
2) 対象の個別性・安全性を考慮した看護援助を、倫理的判断をふまえて積極的に体験する。 (1) 安全管理において管理者の果たす役割を理解することができる。 (2) 患者に起こりうるリスクを予測し、そのリスクを最小限にしたケアや処置ができる。 (3) 患者の人権や平等性に配慮した看護援助ができる。 (4) 複数の患者との信頼関係を築くことができる。
3) チーム医療における他職種との連携・協働を学ぶとともに、看護チームの中でのメンバー、リーダーの役割と、メンバーシップについて理解する。 (1) 実習組織の看護提供体制(看護体制)を理解することができる。 (2) チーム医療における看護職の役割と他職種の役割を理解することができる。 (3) 適切な人に適切な内容の報告・連絡・相談ができる。 (4) リーダーおよびメンバーの役割を理解し、メンバーとしての責任をもった行動がとれる。

学生に対して実施した。

1 病棟あたり 2～5 人の学生を配置し、3 施設、21 病棟を用いて総合実習を行った。実習は日勤の 1 勤務帯で、水曜日を除く 2 週間（8 日間）で行った。学生は同時に 2 名の患者を受け持ち、優先度、時間配分を考えて多重な課題に対応していく。

医療安全、倫理的判断に基づき、対象の個性、安全性も考慮する。安全管理における管理者の役割を理解するため、病棟管理者（病棟師長など）の追跡実習を行う。

看護チームの中でのメンバー、リーダーの役割を理解するため、病棟看護師の追跡実習を行う。カンファレンス等に参加し、他職種との連携・協働について学ぶ。

## 2) 指導体制

看護専任教員 26 名全員が総合実習に携わり、学生 1 グループにつき 1～2 名の教員で担当した。

病棟の指導体制は、主に 1 病棟につき 2～3 名の病棟副師長と臨地実習指導者が中心となり、実習指導を担当した。病棟管理者の役割を理解するために、病棟管理者（病棟師長など）からの説明、指導を受けた。また、看護師の追跡実習も組み込み、複数受け持ち患者の看護については、直接患者を受け持つ看護師からも指導を受けた。

## 3) スケジュール

スケジュールを表 2 に示す。

表 2 実習スケジュール

週	日	実習内容
第 1 週目	1 日目	あいさつ 患者オリエンテーション 受持ち患者の決定 病棟オリエンテーション 病棟管理者オリエンテーション 患者訪問 情報収集・ケア 2 日目の行動計画立案
	2 日目	看護師の追跡実習 病棟業務、カンファレンスなどにも参加
	3 日目	情報収集・ケア 病棟管理者の追跡実習
	4 日目	情報収集・ケア 午後（1 時間）：中間カンファレンス
第 2 週目	5 日目	複数受け持ち患者のケア
	6 日目	↓ 夜勤者への申し送り
	7 日目	
	8 日目	午前：複数受け持ち患者のケア 午後（1 時間半）：最終カンファレンス

## 4. 実習記録用紙

以下に実習記録用紙を示す。2012 年度の変更は、「患者別行動計画」「受持患者記録（看護問題と根拠）」「受持患者記録（経過記録）」についてである。

### 1) 患者別行動計画（図 1）

受け持ち患者ごとの 1 日の行動計画を立てるとともに、ケアや観察の理由や意図を明確にして実習に臨ませている。2012 年度は、「本日特に注目すべき情報メモ」の欄を加えた。その日の受け持ち患者について、ポイントを絞って捉えることができ、速やかに優先順位を判断できる視点を整理するねらいがある。

患者別行動計画	
年 月 日 ( )	学生氏名:
患者氏名	指導者サイン
本日の患者目標 (看護問題を意識して)	
本日特に注目すべき情報メモ (前日の情報、申し送り、夜間記録などから)	
計画・留意点・観察点	左記を計画した理由・意図
8	
9	
10	
11	
12	
13	
14	
15	
16	
17	

図 1 患者別行動計画

### 2) タイムスケジュール（図 2）

受け持ち患者が複数でことによる多重課題に対して、時間的な計画性を意識させるねらいがある。

タイムスケジュール	
年 月 日 ( )	学生氏名
今日の学生の目標	指導者 ( ) 担当教員 ( )
病棟業務	病室/患者氏名/担当 NS
	病室/患者氏名/担当 NS
	患者氏名はイニシャルとする。
8:20	申し送り
9:00	カンファレンス など
10:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>受持患者の人数に応じて縦軸には 2～4 名分記入する。</li> <li>その日のタイムスケジュールを 1 枚にまとめる。</li> <li>分単位で考える。</li> <li>実施済みケアは分かるようにチェックしておく。</li> </ul>
11:00	
12:00	
16:00	
16:50	
実施の評価・学び・感想 (優先度の判断、時間配分についても自己評価する)	

図 2 タイムスケジュール

### 3) 受持患者記録（情報収集用紙）（図 3）

受け持ち患者の全体像を簡潔にまとめる。

### 4) 受持患者記録（看護計画）（図 4）

**受持患者記録 (情報収集用紙)** 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

患者氏名: イニシャル 性別( ) 年齢( ) 入院日: 年 月 日

診断名: \_\_\_\_\_

入院目的: \_\_\_\_\_

- 記録は、受け持ち患者ごとに作成する。
- 書式は自由。
- 情報収集は、患者の全体像がつかめるように簡潔に情報を整理する。
- 実習4日目までに、情報収集用紙を提出する。
- 以後も日々の記録(経過記録)とあわせて毎日提出する。
- 患者変更があれば変更翌日に提出する。

図3 受持患者記録 (情報収集用紙)

図3 受持患者記録 (情報収集用紙)

**受持患者記録 (看護計画)** 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

月日	問題	目標(期待される結果)	具体策(ケアプラン)
立案日	※優先順位をつけてナンバリングする	※退院時の目標とする	※看護計画は、病棟の看護計画を参考にして手元に持っておき、実施する。
<提出> 看護計画と「看護問題と根拠」は、実習4日目までに提出する(病棟の看護計画を参考にしてもよい)。			

図4 受持患者記録 (看護計画)

図4 受持患者記録 (看護計画)

受け持ち患者ごとに立案する。看護問題は優先順位をつけて、ナンバリングする。目標(期待される結果)は、退院時の目標とし、具体策(ケアプラン)を立てる。

5) 受持患者記録 (看護問題と根拠) (図5)

新たに様式を追加した。看護計画立案の根拠(アセスメント)を簡潔に記述する。病棟業務に流さることなく、問題解決に向けた意図的な看護を自覚させるねらいがある。看護問題の立案が、なぜ必要だと考えたかを説明する。

**受持患者記録 (看護問題と根拠)** No. \_\_\_\_\_

(患者氏名 イニシャル) \_\_\_\_\_ 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

月日	看護問題リスト	立案の根拠(アセスメント) [簡潔に記載]
○/○	#1 ○○○○	#1 の看護問題の立案が、なぜ必要だと考えたか、簡潔に説明する。
	#2 ○○○	同上

<提出>  
看護計画と「看護問題と根拠」は、実習4日目までに提出する

図5 受持患者記録 (看護問題と根拠)

図5 受持患者記録 (看護問題と根拠)

6) 受持患者記録 (経過記録) (図6)

看護計画立案後、記録の提出を「必要時」から「毎日」に変更した。2011年度は必要に応じて提出を求めていたが、自己のケアを

**受持患者記録 (経過記録)** 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

患者氏名 イニシャル \_\_\_\_\_

月日	#看護問題 ケア経過 (S・O)	評価 (A・P)

看護計画立案後は、毎日経過記録を記載する。

図6 受持患者記録 (経過記録)

図6 受持患者記録 (経過記録)

振り返り評価することで、患者を継続的に捉えた看護過程が展開できることや、2011年度の実績から複数患者の経過記録の記載も可能である。

### Ⅲ. 目標達成状況

#### 1. 方法

総合実習の目標達成状況を見るため、学生の総合実習評価(教員による評価)を用いた。総合実習評価の内容は、総合実習目標の各項目に沿って、「4:よくできる」「3:少しの援助でできる」「2:かなりの援助でできる」「1:できない」の4段階で評価したものである。

#### 2. 倫理的配慮

2012年度に本学で総合実習を受けた学生78名に対して、総合実習の単位認定後に、総合実習評価表を実習評価のデータとして使用する旨を説明した。参加の自由、匿名性の保護、協力の有無による不利益がないこと、データを目的以外には使用しないこと、データの保管・破棄方法について、文書と口頭で説明し同意書を得た。また、学生の成績評価ではなく、目標ごとの達成状況を分析データとして用いた。

#### 3. 結果

学生の総合実習の目標達成状況を見るために、総合実習評価表をデータとして使用することに同意が得られたのは、学生78名中78名(回収率100%)だった。2011年度と2012年度の目標達成状況を図7に示す。

##### 1) 2012年度実習目標達成状況

全項目において6割以上の学生が、「よくできる」「少しの援助でできる」と評価された。その中でも特に評価が高かった項目は、「2(1)安全管理において管理者の果たす役割を理解することができる。」77人(98.7%)、「2(4)複数の患者との信頼関係を築くことができる。」77人(98.7%)、「3(1)実習組織の看護提供体制(看護方式)を理解することができる。」76人(97.5%)であった。

反対に「よくできる」「少しの援助でできる」



本学における総合実習の取り組み

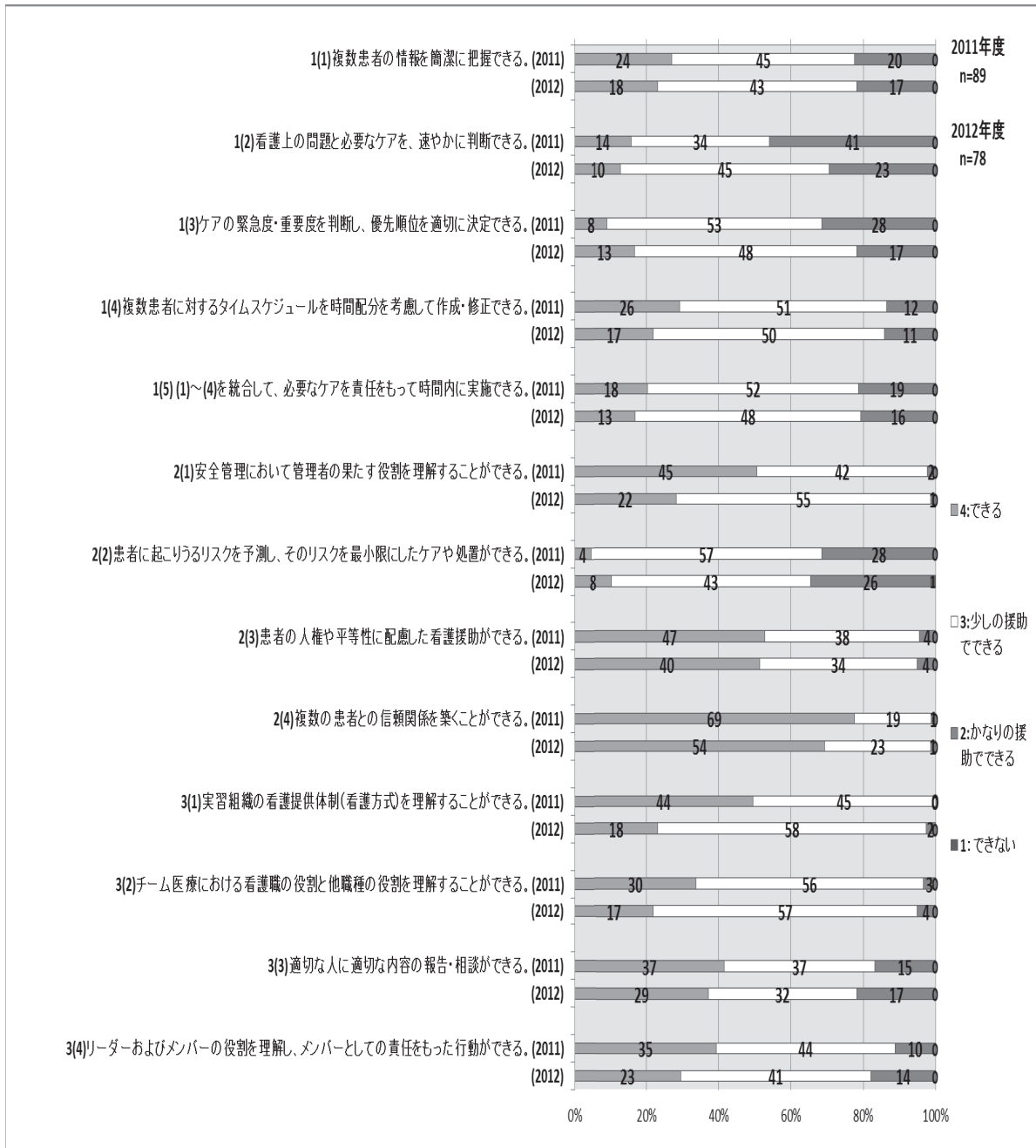


図7 看護学生の目標達成状況 2011年度（別所他，2013）と2012年度の比較

の割合が少ないのは、「2(2)患者に起こりうるリスクを予測し、そのリスクを最小限にしたケアができる。」51人(65.4%)、「1(2)看護上の問題と必要なケアを、速やかに判断できる。」55人(70.5%)、「1(1)複数患者の情報を簡潔に把握できる。」61人(78.2%)、「1(5)(1)~(5)を統合して、必要なケアを責任をもって時間内に実施できる。」61人(78.2%)「3(3)適切な人に適切な内容で報告・相談ができる。」61人(78.2%)であった。

2) 目標達成状況の年度比較

2011年度に課題となった「看護上の問題と必要なケアを、速やかに判断できる」について目標達成割合を2011年度の結果（別所他，2013）と比較すると、「できる」「少しの援助でできる」が2011年度の53.9%から2012年度70.5%へ上昇し（+16.6ポイント）、その分「かなりの援助でできる」が2011年度の46.0%から2012年度は29.5%に減少した。

他に2011年度との比較で上昇した項目は、「1(3)ケアの緊急度・重要度を判断し、優先順位を適切に決定できる。」(+9.7ポイント)と「1

(1) 複数患者の情報を簡潔に把握できる。」(+0.7ポイント)であった。

## Ⅳ. 考 察

### 1. 目標達成状況からの分析

2012年度の総合実習の目標達成状況では、「安全管理において管理者の果たす役割を理解できる」「複数の患者との信頼関係を築くことができる」「実習組織の看護提供体制(看護方式)を理解することができる」という項目について高い傾向が見られた。これは2011年度と同様の傾向であった。総合実習では、教員や実習指導者のみではなく、病棟管理者やそれぞれの受け持ち看護師などによる、より多くの立場の看護師から指導を受けることができた。そのことが、管理者の役割や看護提供体制の理解を進めたと考えられる。科目別実習のような1人の患者受け持ちから複数になっても、学生の積極的にそれぞれの患者に向かう姿勢がうかがえた。

目標の中で特に指導を要したのは、「患者に起こりうるリスクを予測し、そのリスクを最小限にしたケアや処置ができる」「看護上の問題と必要なケアを、速やかに判断できる」「複数患者の情報を簡潔に把握できる」「統合して、必要なケアを責任をもって時間内に実施できる」「適切な人に適切な内容の報告・相談ができる」であった。これらも2011年度の傾向と同様であった。学生は科目別実習では、1人の患者に対して十分に時間をかけてアセスメントを行っているが、総合実習では限られた時間の中での複数患者のアセスメントや判断、タイムマネジメント、リスクマネジメントが求められる。そのため総合実習における目標達成の課題は、複数患者の看護過程の展開にあると推測できる。

### 2. 記録用紙の改訂について

今回の実習記録の変更と活用のねらいは、複数患者を受け持ちながら、要点を押さえた患者把握をタイムリーに行い、問題解決に向けた意図的な看護を展開することにあった。目標達成状況が前年度より特に上昇したのは、「看護上の問題と必要なケアを、速やかに判断できる」

「ケアの緊急度・重要度を判断し、優先順位を適切に決定できる」であった。この結果より、実習記録の活用による目標達成に対する有効性が示唆される。

根拠やアセスメントを記録することによって学生自身の思考の整理となり、学生がより早い段階での患者の全体像への理解に到達できると考えられる。アセスメントを行うことは、ケアの優先度や緊急度、重要度を判断する上で、学生の看護実践の裏づけとなる。根拠やアセスメントの記録によって、学生の思考過程が可視化され、患者理解や看護ケアに対する指導の方向性が明確となった。

### 3. 総合実習の課題と今後の方向性

一方先行研究では、複数受け持ち実習における看護過程の展開方法(記録の内容や記録用紙、記録量など)と目標設定(内容)との妥当性が指摘されている(小林, 2008)。アセスメントをはじめとする、記録量に対する負担感が危惧される。

しかし、総合実習において学生のアセスメントを記録する目的は、根拠やアセスメントから看護実践能力を身に付けさせることにある。総合実習で言う「速やかに」「時間内に実施できる」は、看護業務を単に時間内に終わらせることや、段取りよく業務を行うことを指しているのではない。むしろ臨床現場では、優先順位の判断や状況に応じたケアの実施などの、看護実践能力が求められている。

総合実習における課題は、複数患者受け持ちや多重課題に対する看護実践能力を、いかに育成するかにあると考えられる。そのため教員や実習指導者は、学生が一人一人の患者に対して、根拠やアセスメントを重視した看護の提供ができるように、指導していく必要がある。

## Ⅴ. おわりに

今回2011年度から2012年度に実施した本学における総合実習を振り返った。2年間の総合実習における取り組みは試行錯誤の中での実施であったが、学生は総合実習の目標を概ね達成していたと言える。総合実習における看護過程

の展開への課題があるものの、総合実習だけで補完できるものではなく、学内での演習や各科目実習から総合実習までの蓄積が必要である。その積み重ねの結果が、これから看護職に進む学生の看護実践能力に結びつくと考えられる。

総合実習について、「新人看護師が経験するリアリティショックの一中核をなす理想と現実のジレンマと同様の経験」という見方もある(松谷他, 2009)。しかし、看護チームの中で学生が育てられる環境が総合実習にはあり、看護職を目前にする学生にとっては、臨床により近い環境で学ぶ意義は大きいと考えられる。今後も学生の総合実習での経験が意味づけされるように、臨床の看護チームとともに協力して学生を育てていくことや、指導側においても学生とともに成長していく姿勢が望まれる。

総合実習が、看護基礎教育で習得される能力と臨床で求められる臨床実践能力との乖離の解消につながり、新人看護師の円滑な職場適応への一助となるように一層努力していく必要がある。

## 文 献

- 別所史恵, 平野文子, 三島三代子他 (2013) :  
総合実習における看護学生の目標達成状況  
と課題, 日本看護学会論文集 看護教育,  
43, 74-77.
- 小林紀明 (2008) : 複数受け持ち実習の現状と  
有効性に関する一考察—学生の認識に焦  
点を当てて—, 目白大学健康科学研究, 1,  
111-119.
- 松谷美和子, 佐居由美, 大久保暢子, 他 (2009) :  
看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮  
める「総合実習 (チームチャレンジ)」の  
評価—看護学生と看護師へのフォーカスグ  
ループインタビューの分析—, 聖路加看護  
学会誌, 13 (2), 71-78.
- 塚本友栄, 舟島なをみ (2008) : 就職後早期に  
退職した新人看護師の経験に関する研究—  
就業を継続した看護師の経験との比較を通  
して—, 看護教育学研究, 17 (1), 22-35.

# **The Measure of the Comprehensive Nursing Practicum in the University of Shimane Junior College**

Nami ITO, Kanako SAKANA, Ayumi ISHIBASHI  
Fumie BESSHO, Miyoko MISHIMA and Fumiko HIRANO

**Key Words and Phrase** : Comprehensive Nursing Practicum, Nursing  
Process, Nursing Competence, Assessment, Goal Achievement Situation